

菅谷大助祭

那珂市歴史民俗資料館

菅谷小学校前にある鹿島神社は、もとは「菅谷村」の村社で、大同年間（806～809）に武甕槌命（たけみかづちのみこと）を祭神として、上菅谷の「宮の池」のほとりに創建されたと伝わっています。約900年前、源頼義・義家父子が東北に出陣する際（「前九年の役」）、この宮に戦勝を祈願したとされています。

さらにその後、「後三年の役」の折には、義家が東北からの帰途にこの地に立ち寄り、勝利のお礼として、鹿島明神の傍に、菅（ちがや）葺きの八幡宮を寄進しました。これが「菅谷」の地名になったと言われています。

元禄9年（1696）、水戸藩二代藩主徳川光圀によって八幡宮が廃され、鹿島明神と称しましたが、天保14年（1843）に争論を起こし一時取り潰しとなりました。その後、再建が認められ、安政4年（1857）九代藩主斉昭が鹿島神宮（現鹿嶋市）から分霊し、神社を現在地に移して太刀一振りと絹地に「鹿島大神宮」と親書した宝旗を奉納しました。それ以来、神社の紋は徳川氏の葵紋が使用されています。昭和62年8月には、遷宮130年記念祭が盛大に行われました。

鹿島神社の「大助祭」は、当地に遷宮以来の歴史を持ち、別名「菅谷の提灯祭」として、河北地方にかけて有名なお祭りの一つです。大助祭のいわれは、その昔、たびたびの東北征伐に若者と食糧を出して国土の平定に「おたすけ」した苦勞をしのび、平和と五穀豊穡を祈願したことがはじまりで、この「おたすけ」が訛って「大助」になったと言われています。

祭礼には、菅谷各町内から200～300個の提灯をつけた山車が9台と、大笹竹に七つの提灯をつけた「七ツ雪洞（ぼんぼり）」と呼ぶ竹を持ち、神社境内に日暮れから集合します。境内に集合した山車による大助ばやしの競演は大迫力です。社前では大かがり火をたき、神官が悪病退散悪魔よけの祈祷をしたあと、神刀で四方をお祓いします。

この儀式が終わると、各町内の若者が七ツ雪洞で火を消す火伏せの儀が行われます。早く提灯が破れた町内に福が訪れるとされ、大笹竹の提灯はあっという間に破られて笹竹が宙を舞い、見物人は灰だらけになります。これが終わると、山車は囃子を奏でながら各町内に帰っていきます。



神社境内に集まった山車(左右端)と七ツ雪洞



以前は毎年8月15日に行われていましたが、種々の事情により昭和47年より三年に一度に改められました。現在は「菅谷まつり」のメインイベントとして、人々に親しまれています。

資料館展示室には、大助祭で実際に使用されていた菅谷上之町の山車が展示されています。その傷や汚れからは、人々が山車に込めた大助祭への思いが伝わってくるようです。